

国連による多次元貧困指標

多次元貧困指標 (Multidimensional Poverty Index: MPI) は、「貧困」を所得が不十分な状態より広く「剥奪」という観点から多面的に捉えようという目的で、国連開発計画の支援を受けてオックスフォード大学オックスフォード貧困人間開発イニシアティブ (OPHI) が開発した指標である。もともと OPHI 所長のサビーナ・アルカイル氏らによって理論的に検討されてきた手法の応用である (Alkire and Foster, 2011)。

人間開発報告の 2010 年版から 104 カ国の MPI の数値が公表されているが、同報告でも「貧困の次元は所得の域を大きく越え、健康と栄養の貧しさ、教育と技能の乏しさ、生活の貧しさ、住環境の悪さ、社会的排除、参加の欠如にまで及ぶ。」とし、「金銭を基準とする測定はむしろ重要であるが、その他の次元における剥奪も考慮に入れる必要がある。なぜなら多重の剥奪のなかにある家庭は、所得の貧困指標が示唆する以上に悪い状況に置かれている公算が大きいからである」と述べられている。

MPI は HDI を補完するものとして開発されたため、領域は HDI と整合性が取られている。(MPI を計算するために使用される 10 指標は図を参照) 指標は 100 カ国以上でデータが取れる指標の中からそれぞれの分野の専門家に意見を聞いて決められた。また 10 指標のうち、8 指標はミレニアム開発目標 (MDGs) と関連付けられている。

用いられたデータは、米国海外援助庁が 1985 年から資金援助して 90 カ国以上で行っている人口・健康調査 (DHS)、DHS と比較可能なように設計され、UNICEF が 1995 年から約 5 年毎に子どもと女性を対象として行っている複数指標クラスター調査 (MICS)、世界保健機構が 2002 年から行っている世界健康調査 (WHS) の 3 つである。その上で補完的に各国の個別調査を加味している。

10 指標 (I_i) と与えられたウェイト (w_i) を使用して、個人毎に MPI 上の「貧困」とされるか否か (c_i) を加重平均として計算し、少なくとも 33.33 パーセント以上で該当している場合、定義上、「貧困」とみなされる。つまり、以下の式の通りであり、この結果、「貧困」と分類された者が q 人だったとすると、全人口 n に占める比率 (貧困率) が H となる。また、「貧困」と分類された個人 i がいくつの指標で貧困となっているかを $c_i(k)$ とし、「貧困」と分類された全体 (q 人) の平均 (平均強度) を A とする。その上で MPI の具体的には次のように計算される。

MPI で使用される指標

領域	10 指標 (I _i)	定義 (剥奪された状態)	ウェイト (w _i)	MDGs との関連性
教育	1. 就学年数	就学年数が 5 年以上の世帯員がいない	1/6	MDG2
	2. 子どもの就学	学校に通うべき年齢の子どもが 8 学年まで通えていない	1/6	MDG2
健康	3. 子どもの死	子どもが亡くなった世帯	1/6	MDG4
	4. 栄養	栄養不足の成人または子どもがいる (成人の場合、BMI<18.5m.kg2。子どもの場合、体重の z 値< (中央値-標準偏差×2))	1/6	MDG1
生活水準	5. 電力	電気が来ていない	1/18	
	6. 衛生	衛生施設が良くなっていない、または他の世帯と共同	1/18	MDG7
	7. 安全な飲料水	安全な水が得られない、または往復 30 分以上かかる	1/18	MDG7
	8. 床	家の床が泥、砂、または糞	1/18	
	9. 炊事用燃料	糞、木材または木炭で料理	1/18	MDG7
	10. 資産	ラジオ、テレビ、電話、自転車、二輪車、冷蔵庫、自動車かトラックを 1 つも持っていない	1/18	MDG7

$$c_i = w_1 I_1 + w_2 I_2 + \dots + w_{10} I_{10} \geq 0.3333$$

$$H = q/n \quad \text{MPI} = H \times A$$

人間開発報告書でも触れられているが、MPI にはデータの問題がある。使用データは世帯人員全員を調査対象としていないため、世帯の誰かが「貧困」に分類された場合、世帯全員が「貧困」と分類される。例えば、調査対象となった者の栄養状態が悪い場合、その世帯全員が栄養状態が悪いと仮定して「貧困」と分類される。また貧困層内の不平等は測定していない。また健康データを中心にデータが不足している上、使用データの調査年が対象国によって違っており、2000～2008 年の幅があり、国際比較の意味が薄れている。

より根源的な課題として貧困の多面性をどのように定義するか明確ではない点が挙げられる。つまり、領域、指標に何を盛り込むかはユーザーに任されている。この柔軟性は様々な指標に応用ができるという利点でもあるが、逆に貧困とは何かという根源的な問題を抜きに指標が独り歩きしかねない欠点でもある。貧困の領域、指標をどのように決めていくのか、より人々の声に耳を傾けて決めていくのか、学者等が研究などに基づいてトップダウンで決めていくのか、そのプロセスが問われていると言える。